

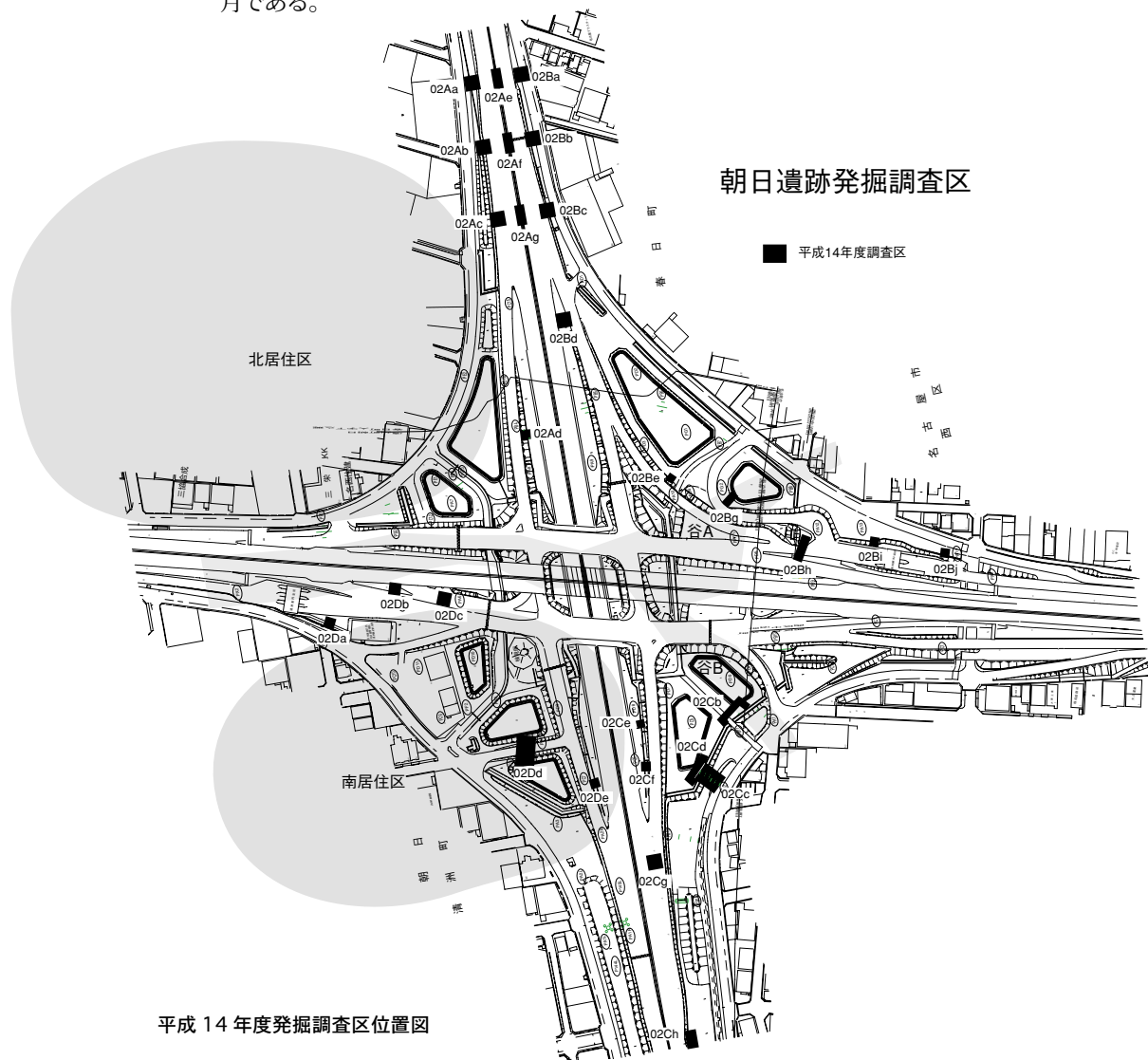
あさひ
朝日遺跡

所在地 西春日井郡清洲町、新川町、春日町、
名古屋市西区
調査理由 近畿自動車道清洲 JCT 建設
県道高速清洲一宮線建設
調査期間 平成 14 年 4 月～平成 15 年 3 月
調査面積 3,877 m²
担当者 赤塚次郎、鈴木正貴、樋上昇、蔭山誠一



調査地点 (1/2.5 万「清洲」)

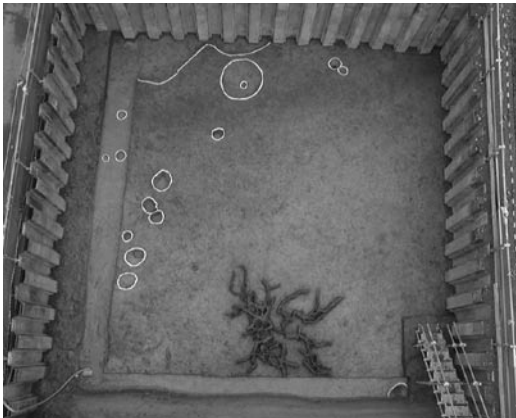
調査の経過 近畿自動車道清洲 JCT 建設および県道高速清洲一宮線建設に伴い、朝日遺跡にかかる部分について事前調査を行う必要があった。そこで平成 10 年度から日本高速道路公団・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通して委託された当埋蔵文化財センターにおいて発掘調査を実施している。今年度の調査は平成 10 年度年報における朝日遺跡「調査区の表記について」に準じて A 区に 02Aa 区～02Ag 区の 7 ケ所、B 区に 02Ba 区～02Be 区、02Bg 区～02Bj 区の 9 ケ所、C 区に 02Cb 区～02Ch の 7 ケ所、D には 02Da 区～01De 区の 5 ケ所の併せて 28 ケ所の調査区を設定し、3877 m²を調査した。調査期間は平成 14 年 4 月から平成 15 年 3 月である。



平成 14 年度発掘調査区位置図

立地と環境 朝日遺跡は西春日井郡清洲町を中心に同春日町、新川町、名古屋市西区に広がる東海地方屈指の弥生時代集落で、現在では五条川左岸の後背湿地にあたる地域となっている。

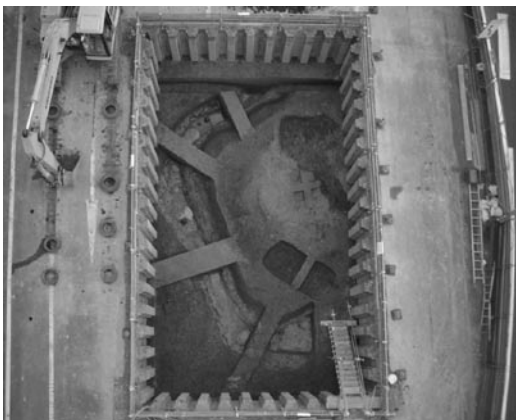
調査の概要 02Aa 区・02Ae 区・02Af 区と 02Ba 区は「北居住区」東の環濠帯の北東外側にあたり、02Aa 区では弥生時代の方形周溝墓の周溝と思われる溝 1 条が検出され、02Af 区では弥生時代中期後葉の方形周溝墓 1 基とその下面から土坑等が検出された。02Ba 区では古墳時代前期後半の自然流路とその流路に切られている水田跡を検出した。水田跡は弥生時代に遡る可能性が高いもので、朝日遺跡における初めての検出である。水田一筆は一辺 2 ～ 3m 程の小区画水田で 10 筆確認された。



Aa 区 1 面全景



Af 区 1 面方形周溝墓の周溝掘削



Af 区 1 面全景



Ba 区 1 面全景



Ba 区 1 面水田跡



Ba 区 1 面水田跡土壌サンプリング

02Ab 区～02Ad 区と 02Ag 区、02Bb 区～02Bd 区は弥生時代中期中葉と弥生時代後期に「北居住区」東の環濠帯とされてきた部分にあたる。02Ac 区の南西隅と 02Ad 区の中央部から東側において検出された溝は同一のものと考えられ、従来の調査では弥生時代中期前葉～中葉の最も内側の環濠と考えられる。同様に 02Ac 区の中央部から東側に検出された溝は弥生時代中期中葉・弥生時代後期の内から 2 番目の環濠に、02Ag 区と 02Bd 区において検出された 2 条の溝は弥生時代中期中葉・弥生時代後期の内から 3 番目と 4 番目の環濠に、02Ab 区の南西隅に検出された溝は弥生時代中期中葉・弥生時代後期の内から 4 番目の環濠に、02Bc 区の西側と 02Bb 区の南西隅に検出された溝は弥生時代後期の内から 5 番目（最外縁）の環濠に対応するものと思われる。



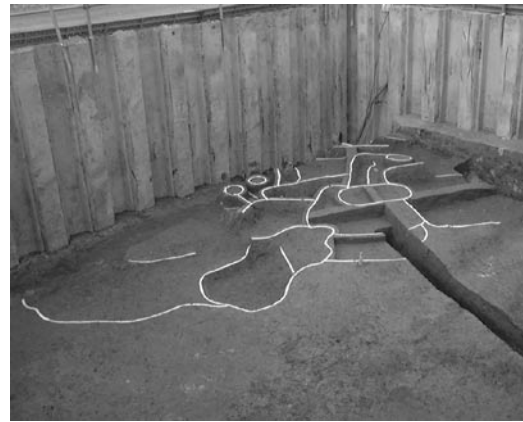
Ab 区 3 面全景



Ac 区 2 面の溝掘削



Ac 区 2 面全景



Ad 区 2 面全景

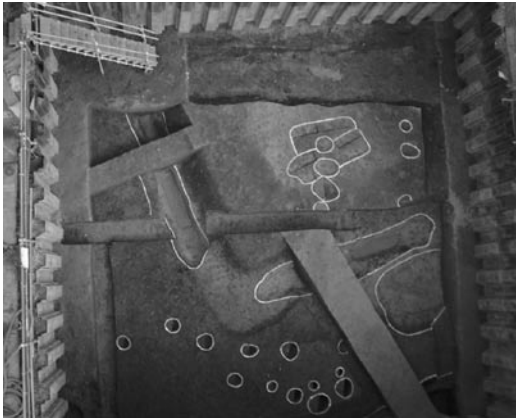


Ad 区 5 面全景



Ag 区 2 面全景

この中で02Bd区の内から3番目の弥生時代後期の環濠において有肩袋状鉄斧が出土した。また、これらの調査区は弥生時代中期後葉において墓域化していたようであり、方形周溝墓が02Ab区・02Ad区・02Af区・02Bb区・02Bd区に各1基、02Bc区に2基検出され、同時期の土坑墓や土器棺墓も02Ab区・02Ag区・02Ac区において検出された。これらの方形周溝墓は弥生時代中期中葉の環濠が埋没した後に周溝を掘削しており、02Bd区の方形周溝墓のように環濠と環濠の間にある高まり（堤）部分を利用したものもある。02Ad区の環濠の集落側において弥生時代中期末～弥生時代後期の竪穴住居や土坑を検出し、「北居住区」の居住域がここまで展開することが明らかに出来た。



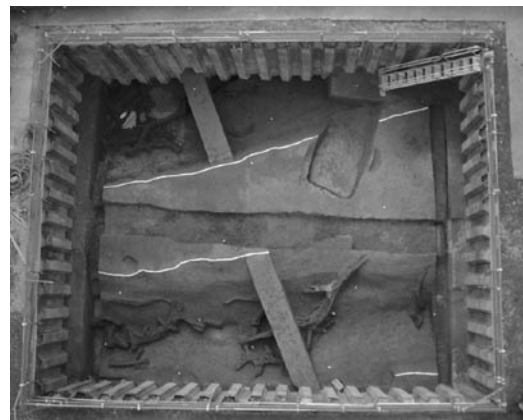
Bb区 2面全景



Bc区 1面全景



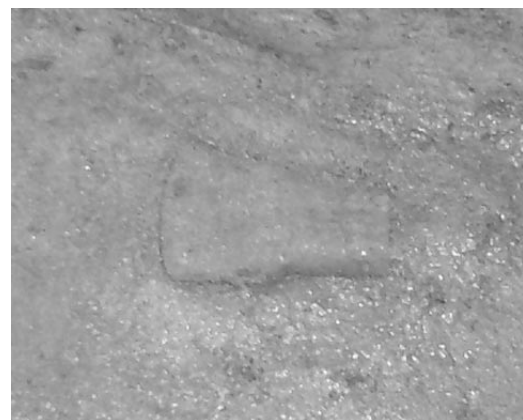
Bd区 1面中世の方形土坑



Bd区 2面全景



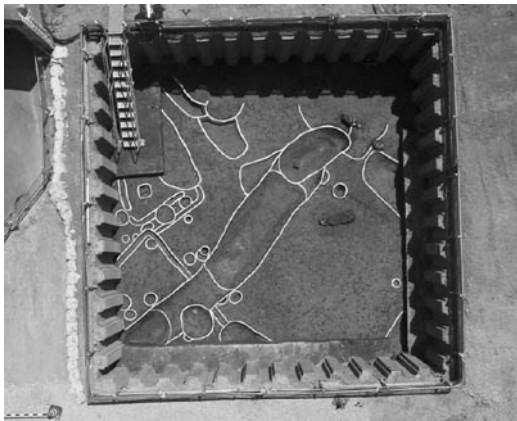
Bd区 2面環濠掘削



Bd区 2面環濠出土袋状鉄斧

02Bg 区は谷 A の北肩部分にあたるものと思われ、谷を流れる流路が微妙に流れを変え、徐々に埋まっていく過程が観察された。谷 A の上層では弥生時代後期の流路が確認され、下層では弥生時代中期前葉を中心とする流路が 3 条検出された。

02Be 区と 02Bh 区～02Bj 区は谷 A を挟んで弥生時代中期の東墓域が広がる部分で、02Bh 区においてかつて調査された大型方形周溝墓の北周溝とその北に広がる小規模な方形周溝墓と思われる溝や土坑などを検出した。02Be 区・02Bi 区・02Bj 区では弥生時代中期前葉～中葉の竪穴住居や土坑、その後形成された弥生時代中期中葉～弥生時代中期後葉の方形周溝墓が確認された。また 02Be 区では弥生時代中期の方形周溝墓の周溝と重複するかたちで堆積した弥生時代後期以後の溝に囲まれた高まりの中で弥生時代後期と思われる横臥屈葬の人骨が 1 体出土した。



Be 区 3 面全景



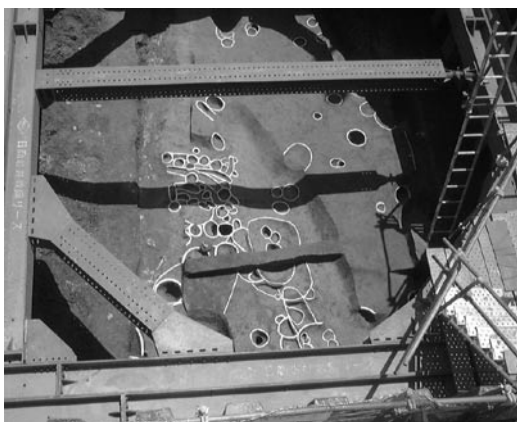
Bg 区 3 面谷 A



Bg 区 3 面谷 A に堆積した貝層



Bh 区大型方形周溝墓の北周溝断面



Bi 区 1 面全景



Bj 区 2 面方形周溝墓の周溝掘削

02Cb 区～02Cd 区・02Cg 区は「南居住区」から南東へ外に出た部分で、02Cb 区では弥生時代中期中葉～中期後葉の竪穴住居と土坑とそれらより新しい弥生時代中期後葉の方形周溝墓の周溝やさらにその方形周溝墓の溝を切って流れた自然流路が検出された。この自然流路はこれまで谷 B とされてきたものに対応し、弥生時代中期中葉以後の洪水堆積の後弥生時代後期～古墳時代前期にかけて流れているようである。02Cc 区と 02Cd 区は隣接する調査区で、弥生時代中期中葉～中期後葉の竪穴住居や土坑と、弥生時代中期後葉～弥生時代後期の方形周溝墓が 5 基検出された。02Cc 区では古墳時代前期の竪穴住居 1 棟が確認され、朝日遺跡の中では大型に分類される一辺約 6m の焼失家屋であった。02Cg 区では弥生時代中期中葉の溝（幅 3.2m 前後、深さ 1.5m 前後）1 条とマウンドの隅部が陸橋状になる方形周溝墓を 2 基確認した。



Cb 区 2 面南側



Cc 区 1 面全景



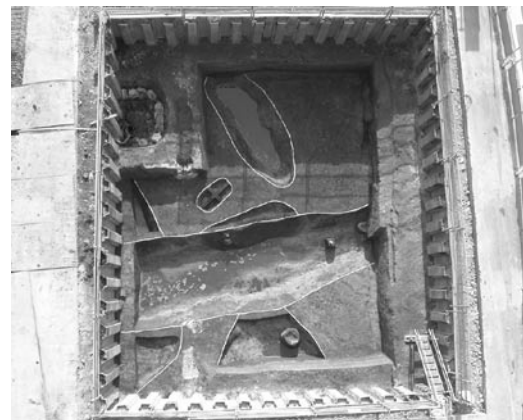
Cc 区 3 面全景



Cc 区 3 面方形周溝墓の周溝出土土器



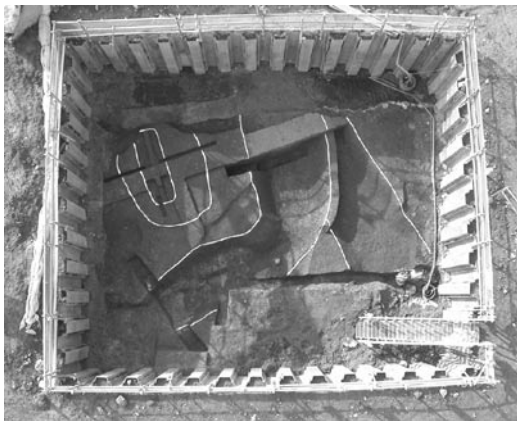
Cd 区 1 面全景



Cg 区 1 面全景

02Cf区・02De区は「南居住区」の南縁辺部にあたる部分で、02Cf区において弥生時代中期前半の環濠と思われる溝、02De区において弥生時代後期前半の環濠が検出された。02Cf区は溝が埋没した後、弥生時代中期後葉の土坑が掘削され、弥生時代後期には方形周溝墓が築かれていた。弥生時代後期の方形周溝墓のマウンド上では主体部と思われる土坑が検出され、ガラス小玉や人骨が出土した。02De区では弥生時代中期後葉の竪穴住居が10棟、土坑が約90基と環濠より新しい弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居1棟と土坑も確認された。

02Ce区・02Dc区・02Dd区は「南居住区」の内部に位置し、02Dc区では、弥生時代中期前葉～古墳時代前期前半の竪穴住居約100棟、土坑約500基を検出した。02Dd区



Cf区2面全景



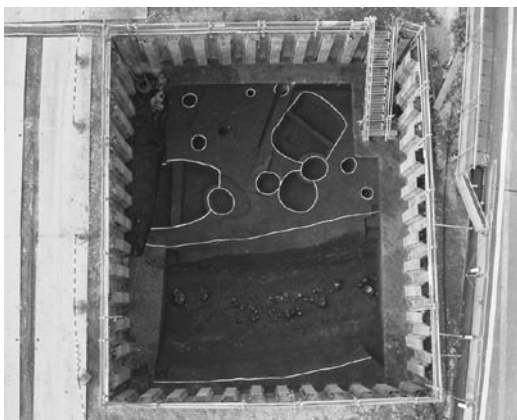
Cf区2面方形周溝墓



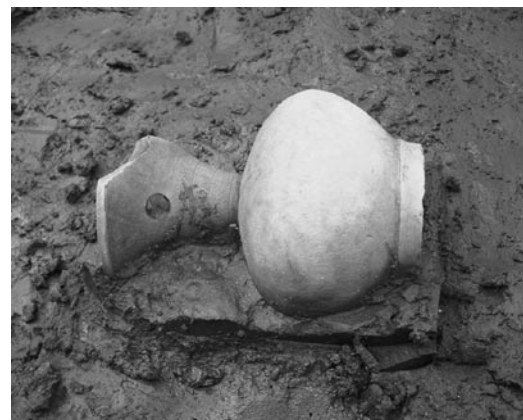
Cf区3面全景



De区1面環濠遺物出土状況



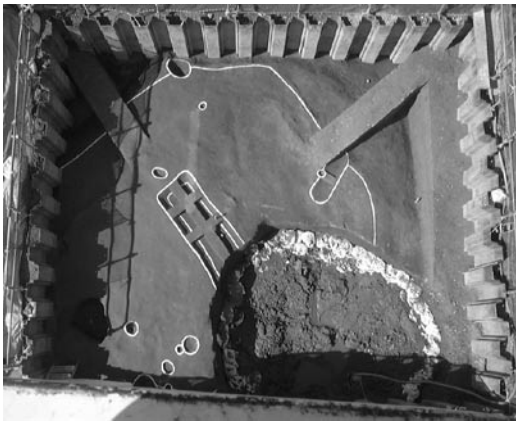
De区2面全景



De区3面環濠出土弥生土器

では弥生時代中期前葉～古墳時代前期前半の竪穴住居 10 棟程と土坑約 150 基、弥生時代中期前半の区画溝 1 条を検出し、弥生時代後期の巴形銅器が出土した。02Ce 区は調査区のほとんどを近年の攪乱によって破壊されていた。残存した部分は遺物包含層が約 0.75m あり、出土した弥生土器は弥生時代中期前半と弥生時代後期後葉に区分できる。

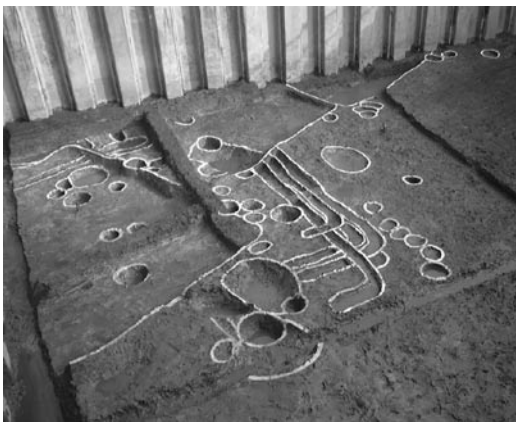
02Da 区と 02Db 区は「南居住区」の西外側に展開する西墓域にあたる部分で、02Da 区は弥生時代中期後葉～後期の方形周溝墓 1 基、弥生時代中期中葉の溝 2 条、土坑多数を検出した。02Db 区は弥生時代中期中葉～後葉の貝層の腐食したものと炭化物を多く含む堆積が北にある谷 A に向かって傾斜して堆積し、その上部において弥生時代中期中葉～弥生時代中期後葉の竪穴住居約 75 棟、土坑約 150 基を検出した。方形周溝墓などは検出されなかった。



Da 区 1 面全景



Db 区 1 面遺構掘削



Db 区 4 面全景



Dc 区 2 面全景



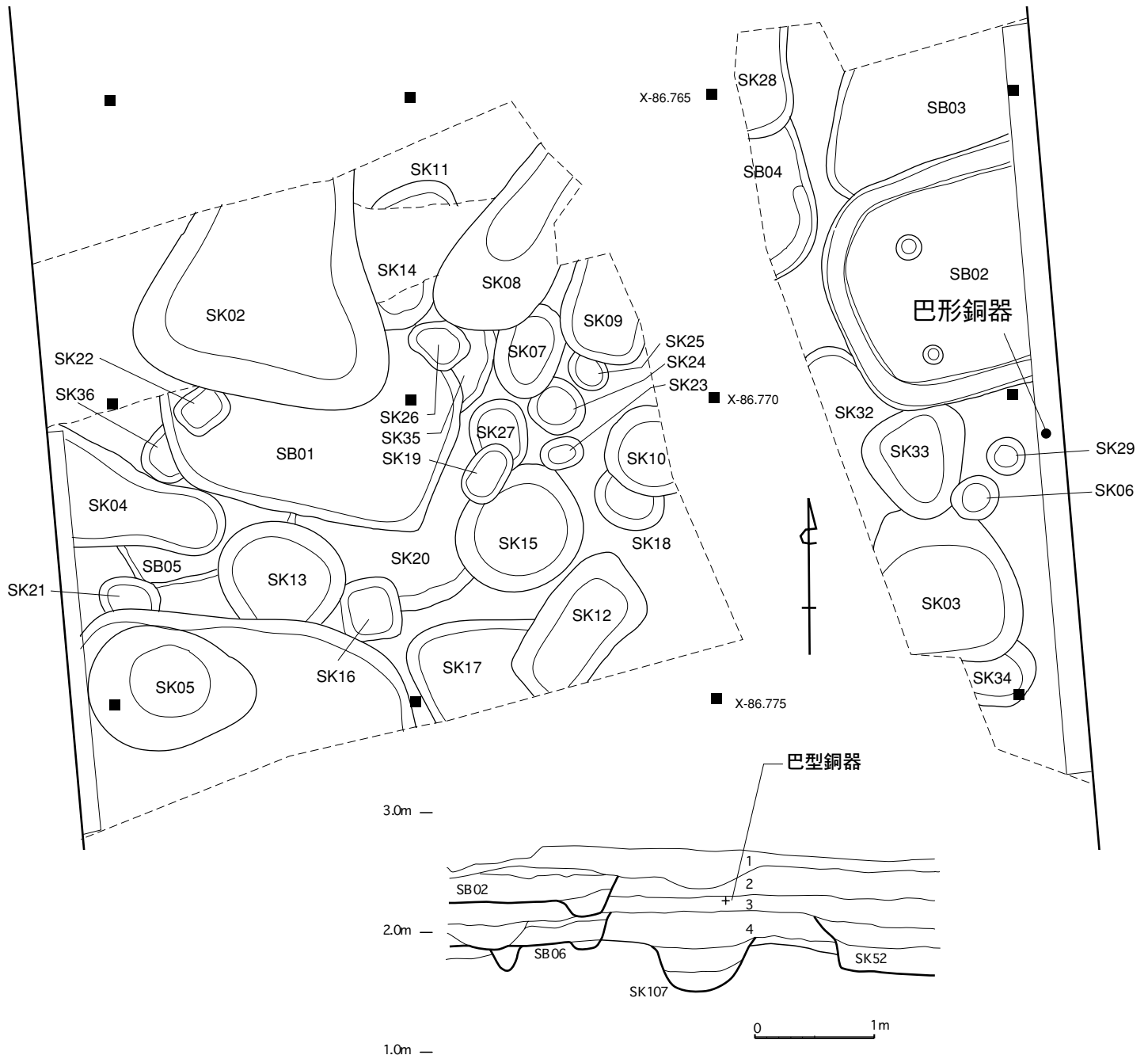
Dc 区 4 面測量



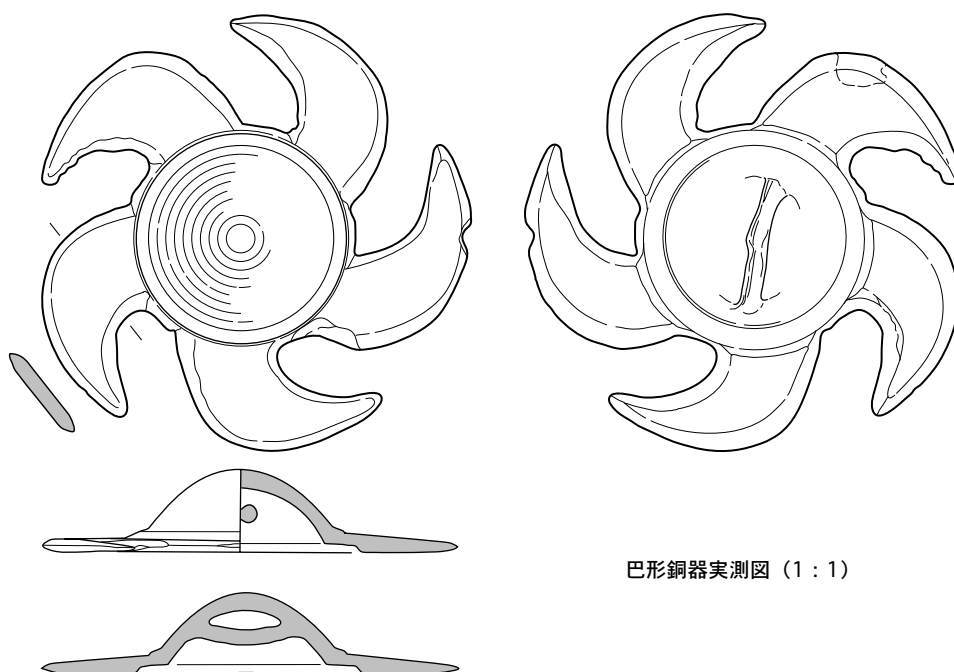
Dd 区 1 面全景

02Dd区出土 (1) 出土状況と所属時期

の巴型銅器 出土地点は、調査区 02Dd 区竪穴住居 SB02 の南側に近接し、調査区を囲むシートパイルに設定したセクションベルト内(包含層)で巴形銅器は表面を上にしてほぼ水平に置かれたような形状で出土した。層位的には、断面図から明らかなように、第3層上位に位置し、第2層から掘削されている竪穴住居 SB02 からは山中Ⅰ式1段階の高杯が床面上から出土している。また同一遺構検出面では、SB02 に重複する SK33 から、山中Ⅰ式2段階の資料が確認できる。さらに第4層から掘削された SK52 は、弥生中期末葉の高蔵式期の土器を包含する。したがって層位的には山中Ⅰ式期から高蔵式の間に位置づけることが可能である。遺構配置や層位を総合すると、巴形銅器の所属時期は、山中Ⅰ式2段階を中心とする時期を想定しておきたい。



上：02Dd 区 1 面遺構平面図 (1 : 100)、下：02Dd 区東壁セクション (1 : 50)



巴形銅器実測図 (1 : 1)

(2) 巴形銅器の特徴

5脚左振半球形座棒状鈕巴形銅器であり、巴径は5.6cmで座径は3.0cm、高さ1.1cmを測る。全体の形状が残り、保存状況も極めて良好な資料である。表面は全体に研磨痕跡が著しく光沢をおびる。半球形座の座縁部には段が見られる。内面は二次的な研磨痕跡がほとんど見られず、鑄出した状況をそのままとどめているものと思われる。座の中央部には棒状鈕が見られ、座内面と脚との間には4mmほどの一段の窪んだ平坦面が存在する。脚の端部は内外両面ともに2mmほどの斜面が認められる。こうした微小な段差や斜面からは、巴形銅器の上下鑄型の形状を復原することができ、鑄型の両面に巴形銅器の脚部を含めた輪郭線が丁寧に描かれていたことを類推することができる。脚部は幅広で、短く鋭く振じる形態を留める。各脚の間には脚幅ほどの間隙を置き、バランス良く配置されている。以上の形態的な特徴の中で、特筆できるものを整理すると以下のようにまとめることができる。座縁部の段の存在、均等に配置され幅広で短く鋭く振じる脚部。上下の鑄型に加工が施されたことによって生じた、脚端部両面に残る斜面と座内面の窪んだ平坦部の存在。以上の諸点はいずれも弥生後期巴形銅器の古相を主張する要素として指摘されてきたものと考えることができる。最も類似する資料としては佐賀県唐津市桜馬場遺跡出土品Aと考えることができるが、5脚という点と棒状鈕、座内面の窪んだ平坦部の存在などは他に例を見ない特異なものである。また巴形銅器の内外面には赤色顔料が付着しており、分析の結果からは、ベンガラであることが判明している。出土地点での観察所見からは、周囲に赤色顔料が見られないことから、付着した顔料は、使用時におけるものであることが想定できよう。

中 世 中世の遺構は弥生時代～古墳時代の遺物包含層の上から掘削されるもので、方形土坑と水田跡とそれに伴う溝がある。方形土坑は02Ac区3基、02Ad区5基、02Ag区2基、02Af区1基、02Bc区1基、02Bd区4基、02Bj区2基、02Db区2基、02Dc区1基の計21基検出された。また02Cb区において谷B埋没後の中世後半の水田跡とそれに伴う溝を土層観察にて確認した。(蔭山誠一)